

提出日：平成 21年10月16日

「東北大学で学ぶ情報教育セミナー」実施報告書

小野寺香絵（東北大学大学院情報科学研究科 技術支援スタッフ）

場所
東北大学 大学院情報科学研究科棟 311教室
日程
2009年10月13日（火）10時～15時30分
プログラム
午前の部「メディア活用表現力講座」 午後の部「インターネット時代の知的財産権入門」
講師
午前の部：坂田邦子 午後の部：浜田良樹
参加者数
20名（仙台市教育関係者：8名・東北大学関係者：12名）
概要
【セミナー概要】 仙台市教育委員会および小中学校の教員を対象に、情報社会を生きる上で子どもたちに身につけてほしい能力や知識を深めてもらうことを目的として、研修を実施した。第一回目の今回は、以下の2つのワークショップを開催した。 1. 午前の部「メディア活用表現力講座」～ワークショップ「ともだちの絵本」 10:00～12:30 (目的) 小中学校の授業に応用してもらうことを前提に、送り手・受け手・取材される立場を経験することによって、インタビューの方法や記事の書き方を学ぶだけではなく、インターネット・雑誌・新聞などのメディアによって描かれ方に特性があることを体験的に気づかせることを目的とした。 (内容) 第一部：導入「考えてみよう！」 ～人物紹介記事について新聞・雑誌・インターネットといったメディアの違いや、想定している読者層の違いなどによって、どのように伝え方が違うのかを分析。 第二部：実践「友達の魅力をアピールする」 実際に取材をしながら、自分が想定したメディアで人物紹介の記事を書く。 第三部：発表「意図は伝わったかな？」 出来上がった記事について発表と感想。

(参加者の感想)

- ・ こどもの立場を体験することにより、自分が感じたことを今後の授業に加味していける。
- ・ 読者によって受け止め方が違うのを勉強できた。
- ・ 一人一人が正解を作ってもちかえることができる研修でした。
- ・ 取材する側の気持ちがわかった。
- ・ 教師側が意図を明確にして授業を行う必要があることがわかった。
- ・ タイトルやリード、写真の表現を変えることによって、相手にどう伝わるのかがわかり、また、自分の思いが本当に伝わったのかを確認することで自己評価もできる授業だと思った。
- ・ 情報の伝え方は、受け手が誰であるのかによって大きくかわることがわかった。
- ・ 制作をとおして作り手側の立場に立つことで、伝える側の意図や、意図に沿った編集の仕方というものについて考える機会となった。

(参考書籍)

『メディアリテラシー・ワークショップ 情報社会を学ぶ、遊ぶ、表現する』

東京大学出版会より 2009 年 11 月刊行

午後の部「インターネット時代の知的財産権入門」 13:30～15:00

(目的)

- ・ リスクの所在を正しく認識できる。
- ・ 法律の枠組みを正しく認識できる。
- ・ 児童・生徒を萎縮させず、知的財産権を大切にすることをはぐくむための教授法を考える。

(内容)

著作権について説明後、夏休みの自由研究「天気予報」・「宇宙」について、こどもがインターネットのデータを使用した場合に教師としてどう対応するのかディスカッションを実施。

(参加者の感想)

- ・ 法律は解釈がわかることを認識し、教える側のスキルや豊富な知識が必要だということがわかった。
- ・ 知的財産権について、ディスカッションを通しながら色々な条件付けをしないといけなく、指導者として意図を決めて、こどもたちと向き合うことが必要なのだと考えるきっかけになった。
- ・ 浜田先生の「進化する法律に常にアンテナを張っておかないといけない。」という言葉が印象的だった。また、「ネットに情報を書き込みました人に感謝することが必要。」という話を聞いて、人を思いやる気持ちが根本的に大事なのだとわかった。
- ・ 発達段階に応じてこどもたちに考えさせないといけないことがわかった。